



筆者近影 庄戸の自宅にて 令和5年5月

私は、五年前に妻を亡くし、今年三月に九十一才になった一人暮らしで、最近心身の衰えが著しいので我が家での一人暮らしは無理になりました。娘二人と相談した結果、二人の勧める有料老人ホームに五月に入りました。新しい施設では、比庵その他の事柄からいっさい手を引き、静かに人生の最晩年をここで迎えたいと決心しました。それに伴い比庵佳境の会の会長を退き、会報も本号で終了します。

二〇一四年に「墨の美術館」での比庵富士展を期に「比庵佳境の会」を結成し十年経ちました。この間、比庵の足跡を訪ねる旅や、各地での展覧会の開催や講演会、会員の寄稿による会報の発行と活動して参りました。歌、書、画の三芸に秀でた清水比庵の作品はもとより、それを通じた人と人の繋がり、関係者のご協力があったらなくては感謝しております。

今年比庵生誕一四〇周年にあたり、比庵の故郷岡山県だけでなく首都圏等でも展覧会があり、愛好者が増え比庵の孫としても大いに感謝しております。

「比庵佳境の会」会報第二十号発行にあたって
会長 清水 固



金太郎
昭和10年（固 3歳時）

比庵佳境の会

2023年9月
会報第20号

清水比庵生誕
140周年

為 固坊
比庵

書の歩み ―清水比庵講演筆記録から―

相模女子大学名誉教授
全国大学書道学会副会長

柿木原 くみ

ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけ
うぐひすの声山よりきこゆ

この歌は、昭和四十一年一月、宮中歌会始の儀に召人を拜命した比庵の詠進歌である。同年十一月、全国大学書道学会（於東京学芸大学）で「書の歩み」と題して講演している。

全国大学書道学会は本年六十五周年を迎え、年に一度の大会開催時には外部講師による講演を実施している。筆者は比庵年譜上でこの記述を目にして以来、「書の歩み」の内容はいかにと興味を持っていた。今春、故前田舜次郎先生（元跡見学園女子大学教授）の書籍の整理に参上、書架に茶表紙の小冊子「書の歩み 清水比庵」を発見、他には『紅をもて』や『比庵いろは帖』も収蔵されていた。

ところで、前田先生の師は上田桑鳩である。比庵年譜の昭和三十七年の項に、秋、小林和作・上田桑鳩と尾道市西国寺本堂（筆者注・持佛堂）の襖に合作して自詠を大書する、とあり『紅をもて』には襖に書いた歌は、朝あけし吉備の海路を秋風にこぎゆく舟のゆきあへる見ゆ、とあった。また、「書道グラフ」昭和四十一年十一月号は比庵と桑鳩の作品特集号である。主幹の青山杉雨は、両氏の作

を合冊したのは特に芸術上の系列からではなく、偶尾道の西国寺の襖を小林和作氏の下画で書かれた機縁から着想したが、野趣の気に満ちたその作風には一脈通ずるものがあり、江湖の鑑賞者に併載して供するにふさわしい内容のものではないかと、記している。

以下は「書の歩み」（比庵講演筆記録）ほぼ全文を原文のまま掲載するものである。

只今ご紹介を受けました清水であります。

この講演を引き受けるにあたり伊東先生からのお電話で、肩書きには困りました。文学博士とか芸術院会員とかいうような立派な肩書きがあるといいんですが何も無い。それで結局、今年お歌会初めに召人として歌を献詠しておりますから、歌よみということにして頂きました。

今日は林武先生と二緒だということで、非常に楽しみにしておりましたところが、林先生がお見えにならないということで、寂しい感じがしました。その代わりに時間が少し増しまして、時間がどの位かかるか計算が立たないんですが、まあ、お話を自由に続けさせていただけようと思います。

林先生のことが出ましたから、一寸、林先生のことを思うんですが、こないだ、こちらの学校の小池君が来て曰く、林先生という人は話が上手いし顔を見るだけでも得る所があるということ、林先生には、西銀座の吉井画廊で、中川一政先生の画展があった時に、私が帰るとすれ違いに先生がお出になつた。誰からも紹介を受けないが、かねて写真で見ているお顔で先生だということがすぐ解

りましたが、なるほどその通りの、お顔を見るだけでも得る所があるお顔でありました。

顔の話になりますと、私にも顔の話がある。私が郷里で街を歩いておりますと、幼稚園の女の子が三人通つておりまして、私の顔を見てすごく笑うんです。それで私も何を笑うのかと思ひまして、その幼な子の所へ寄つて、何が可笑しいんだと言ひ質してみましたら、一寸承知できるんですが、女なのにヒゲがあるんだと言う。子供というものは、実に奇想天外なことを言うもので、子供でなければ言えない表現があると思うんです。そういう顔の私は持ち主なんです。

私は歌のあるグループにありますが、そのグループの人達に、人間は社会に奉仕しなければいかん。奉仕のできるような人間でなければいかんと主張している。その奉仕の一つとして顔の奉仕がある。人間は良い顔をして

おればそれが社会への奉仕になるという主張なのです。良い顔をしておる人が集まると、自然平和にもなる、それから和やかになる。それからまあ文化の発展をする。人間はそれで顔が良くなければ仕事も良くいかん。例えば書道で言ひましても、顔のいい人でないと書がうまくないと、こういう結論になります。

顔がいいと言ひことはハンサムボーイと言う意味ではない。エレガントと言ひますか、そのグツと応える顔です。そういう顔の持ち主でないと、仕事もうまくいかない。森陽外でしたかネ、三十までの顔は両親の責任だが、三十から以後の顔は本人の責任だと。顔を良くするのも悪くするのも本人次第で、心がけ次第で良い顔になる。こういうことを言つと

るんですが、その通りだと思ひます。

私は元來書家になろうとか歌人になろうとかいうようなもくろみがなくて、ただ好きであるから書をかき歌を詠み、それから絵をかいて遊んでおりましたが、何時のまにか名前が知られ話題になるようになり、ただ今回ご紹介を受けた伊東先生とも面識がなかったのに、私の事をこ存じだと言ひお話で、自然に皆様の話題になるということは非常に有難い。

それについて私は何時もする話ですが、棟上げの話をしてしましよう。棟上げで餅を投げる。それを拾うのに大勢集まつている。中に子供を連れのおっかさんがやって来て、子供に餅を見てはいけないう。足元をジツと見ておれ、そしたら餅がころんでくる、それを拾うんだ、そう言つて拾わたさう。

私もやはりその棟上げと同じで、足元をジツと見ておると餅がころんできたという形になった。非常に有難いことです。でも、私はすべての芸術家はその棟上げの餅のように足元を見ておれとは言ひません。それは腕力のある人は餅を見ておつて、餅のくるのを争うて取るのも宜しいが、腕力のない私のような芸術家は、ジツと足元を見ておつて、ころんできた餅をサツと拾う。芸術の上でそういう生き方もあると私は考へております。

足元を見ておるといふことは、芸術的に申しますと、個性に徹するということであります。個性に徹しておると、何時か餅がころんでくる。こう私は申し上げたいのです。私は歌と書と絵とをやっております。欲張

っているようですが、それらは皆関連してお
りますので、一つだけと言つわけにいかない。
それでその三つをやっておりますが、初めの
うちは、歌よみの所へ行くと、お前の絵はと
てもエエと絵をほめる。歌をほめないで絵を
ほめる。それから書家の所へ行くと、お前の
歌は非常にエエと、書をほめないで歌をほめ
る。絵かきの所へ行きますと、絵をほめない
で、お前書がうまいなとか言いまして、皆
このちよつと見当のはずれた所をほめてくれ
る。それが漸くこの頃には少し変わつてきて、
ある、という字がつかますが、ある歌よみは
歌をほめてくれて、ある書家は書をほめてく
れる。それからある画家は絵をほめてくれる。
そういうことになりました。

私の書は、書を立派に書こうというよりも、
歌を立派に書こうという書なんです。歌を立
派に書こうというための書なんです。歌を立
派に書こうというために、歌よみの書です。昔
をいいますと、行成卿とか佐理なんかは、歌
も詠んだかもしらんけれども、書が第一で、
それに比べると定家という人は、書はとも
行成、佐理に及ばんけれども、歌詠みである
ところがこの頃、段々定家の書というものが、
書家の間に話題になっておる。仮名を書く人
は古筆を勉強するんですが、古筆はちっちゃ
な字ばかりで、大きな字が書いてない。この
頃はまた大きな字を書くことがはやってきた
が、大きな字を書くのには、どうも佐理、行
成の書を拡大したような字では面白くない。
それで参考になるのが、その定家の字とい
うようなことになっておるらしい。と、いうわ
けで、定家も味わえる字を書いたということ

になる。まあいわば私の書は、定家の書の如
く歌を書く書であると言つてもさしつかえな
いと思います。

支那でも絵の方では文人画というのがあつ
て、文人の描く別の絵があり、それから、書
でも別に取り扱っているようですが、そのよ
うに私の書を歌人の書と、言つてもらつても
さしつかえないと思つている。肩書きを歌人
と言いましたのは良かろうと思つています。

*

私の幼年時代のお話をしましょう。私は岡
山県高梁の出身ですが、この高梁は、昔京都
所司代の板倉重宗の後裔の板倉侯が藩主だつ
た。維新の当時は板倉勝静という人が慶喜公
の大政奉還の立役者として、老中で活動しま
した。これは偉い人で、山田方谷という学者
を顧問にして働いた人でありました。そうい
う藩でありますから、学問が盛んで、私の父
も士族の出でありますので、漢学を少しやつ
て、漢詩を作りまして、人から頼まれては詩
をよく書いておりました。書いては書き直し、
書き直し、どうも駄目だ駄目だと言つて書き
直しておりました。私はそばにおつて、小学
校時代のことですが、見よう見まねでお習字
をしておると、この子は親に似て、蛙の子は
蛙の子だ、どうも書はまずいと、こう言われ
ておりました。その頃士族の子供と言つても
は、小学校へ入る前から、論語、孟子の素読
を習つたものです。難しいものを、訳は説明
してもらえないで、ただ読みだけ読む。学ん
で而して時にこれを習う、又喜ばしからずや。
これは論語の初めの言葉ですが、こういうよ
うに習つた。今になってそれを考えてみます

と、その時はただ素読で習つただけですが、
論語の言葉というものは非常にエエ。

学んで時にこれを習う。学ぶということは
真似をすること、時にこれを習うということ
はくり返す、もう一度すること。書道にも学
んで時にこれを習う、練習して書地完成する
ということとは今日でもある。また、朋有り遠
方より来る又楽しからずや。その朋というの
は朋友の朋の字を書く、これは同学の友、趣
味を同じうする友、普通の酒飲み友達とい
うのは又違う。朋有り遠方より来る、丁度今
日のような同じ書道をやられる方が遠方より
来つてお集まりになる。朋有り遠方より来る
又楽しからずや。どうも論語の言葉は非常に
エエ、私はつくづくその事を考えまして、小
学校へ行かん前から難しい漢字を、こうして
返り点を教わりながら読んだのがつくづくと
楽しい。

もう一つ申し上げますと、論語の中に、人
生を五つに分けた有名な言葉がある。むろん
ご承知でありましたが、吾十有五にして学
に志し、三十にして立ち、四十にして惑わ
ず、五十にして天命を知り、六十にして耳順
い、七十にして己の欲する所に従つて矩を踰
えず、この五つに人生を分けた。これは実に
よく分けたもので、三十にして立ち、四十に
して惑わず、四十になつたらもう惑わない。
自分の道がもう解つた。この道を行けばいい、
惑わない。五十にして天命を知る。それで
もう止めてしまつて、これが天命だから、も
うこれ以上ならんのだからと言ふんじやな
い。殊に書道ではそれから、五十から以後
が非常に必要なんで、六十にして耳順と言

うことは、人の言う事なんか大して苦になら
ん、なんと言われようと苦にならん、耳順い
と言ふことは、人の言う事を、おうそうかさ
うかという。私の歌に、

言うところ宜しよろしと声高き

茶飲み話は老いものなり

と、こういう歌がありますが、そういう境遇
なんです。宜しよろしと言いながらも、なか
なか自負心が高い。七十にして己の欲する
ところに従つて矩を踰えず、いい所がちゃん
と解つておる。孔子は七十だが、今はそうはい
かない。私は八十だが矩を踰えずという所ま
ではまだ間がある。しかし、人生をその五つ
に区切つた所は非常に面白い。それを書道な
ら書道に当てはめてみると、実によく急所を
言ひあてているのがお解りでしょう。

今の人は、小学校に行つても、簡単な合理
的というのですか、そういう学問ばかりして
おつて、昔のように破天荒な思い切つたこと
をやらない。それが今の私にとつては、前の
時代に受けた教育が大変有難いと思つわけ
です。そういうことを言っているのを何かの本
で読んだような記憶がありますが、はじめか
ら合理的に、見やすい所から難しい所へ行く
んでなしに、はじめから難しい所をやつても
エエと思つのですが、まあそれはともかくと
して、そういう時代だったんですね。

私は小学校へ行きまして、お習字をやりま
したが、蛙の子は蛙だとおやじに言われた通
り、小学校のお習字の成績はそんなに良くな
かつたように思う。丸は時々もらつたが二重
丸はもらつた覚えがない。ところがですな
小学校に面白い先生がおつた。それはやはり

高梁藩の士族であつて、石川主一という先生でありましたが、石川丈山の流れだと言つて威張つていた。その人が校長先生になつていた。今までの校長先生は学校出の若いスマー

トな先生であつてヒゲをはやした若い人であつたんですが、今度の先生は五十代であつたのでしよう、よほど老人のように子供に思いました。ヒゲも何もない、背の高い大きいボヤツトした先生であつた。髪は総髪で、その先生がやつてきて無闇に子供を叱る。コラッ！悪いことをするとコラッにとらみ叱る。ハツと思つてみるとニツコリ笑つておる。叱られたけれども何だか面白い。そういう先生だつた。その人が校長だが、お習字と作文とを受け持つた。作文は候文というのがあつて、昔は書簡文は何々候、候文ばかり習わせる。こりや不平でどうも面白くない。だけども候文ばかり作らず。それからお前等習字は楷書ばかり習つてもしかたがない、草書が書の元なんだ、草書さえ習つておれば楷書など習わなくともいいんだと。その当時はね、書簡文は草書ばかりで書いた。草書が実用文字であつた。ところが私は、作文の候文は気に入らなかつたが、草書は気に入つた、面白かつた。草書の方が楷書を書くよりよっぽど面白かつた。私はネ、どうも書道教育の中でそれがひとつ参考になりやしないかと思う。初めに草書を習わせると、一気に書くんだから面白い。それから中学校へ行きますと、今度は又、おじいさんの漢学とお習字の先生で、荒木高養という偉いおじいさんだつた。その先生は懐をいつもふくらして、何でも懐に入れて歩いた。学校からの帰りには豆腐を買つて豆腐

を懐に入れて帰つた。そういう先生だがそれがなかなか書がうまいし、漢文がうまい。漢文を読まれると、子供ながらにも恍惚とする。実に読みがうまい。

壬戌ノ秋七月既望、蘇子客ト共ニ赤壁ノ下ニ遊ブ、清風徐ロ二来ツテ・・

このような、ちよつとエエでしよう。そういう先生で、その人はお習字を本格的に練習した人と見えて、筆法を非常に詳しく教えてくれた。私の習字の基礎というのはその先生から授かつた。私はその先生を非常に尊敬しておりましたが、お習字の点はよくない。甲をもらつたことはめつたにない。神社柳吉という私の友達がいいて、これがお習字が抜群で二重丸、三重丸を貫う。しかも力の強い男で、私は一編戟剣を神社とやつたところが、パンパンと押しまくられて何ともしようがない。立ちすくんで、閉口々々と言つたことがある。お習字と戟剣には敗けたけれども、学校の成績は二、三番私の方が上だつた。

＊

その神社が私と同じように六高から京都大を出したが、大原系の企業に就職しまして、倉敷紡績の社長にまでなつた。辞めて阪神間の若屋に住んでおりましたが、その娘婿が岡山におつたもんですから、時々岡山へ来まして、時折私の噂話を聞く。この頃は清水は大分書がうまいといわれておるが、清水がうまいはずがないぞ、ありや中学校の時は低脳だつたぞ。ひとつ清水に言いつけてくれ、お前が一番エエと思つた書を俺の所に一枚送つてくれと。それを聞いた私は、一枚書を寄こせと言うならやるんだけど、一番エエ書と

いうのが、ちよつとしゃくにさわつた。それで、やらないうちに神社は、あるちよとした過ちがもつて失明してしまつた。

こりや非常に気のどくと思つておりましたところへ、芸術新潮の人が私に書のことを書いてくれと言つてきた。歌はどうも芸術新潮にむかんから、書のことを書いてくれと言つた。それでこれは神社に読んで貰いたいと思ひまして、盲書ということを書いた。盲人の、めくらの書ですな。支那ではあるそうですが、日本では、めくらで書を書いた人を私はあまり知らんのですが、岡山に帰庵和尚という和尚さんがおつて、これが実に書がうまい。慈雲の書に私淑しておつて、それが非常に沢山に書を書く。かつてある人が慈雲に、あなたの書のニセモノが出たということをやつたら、ニセモノが出るといふのは俺の書が少なから出るんだと、沢山書いた。それに習つて帰庵和尚も非常に沢山書いて、岡山県人で帰庵和尚の書を持っていない家はほとんどなかるうという位書いたものです。それが大きい字を書く。全紙に二字位書くんで、私は大きな字を書くには墨が大変いるだろう、といううと、そう、五時間するのだ、で、書くのは十分位で書けるという。そりや大変だ。それで君がするのかと聞くと、そりやするよりしようがないという。それからしばらくたつて、又、墨をするのは大変でしようと言つて、いや、この頃は墨を人にすらせるのだと、こりや言つておりました。そういう人ですが、それが歌に熱心になつてきまして、私との交際が始まるんです。熱心になつたら又馬鹿に熱心なんで、誰を掴まえても歌の話をする。従

妹がやつてきた時も、おまえ歌をやるか？歌をやらん？そんなら用はない。そういう人なんで、その人が私と交際をしとるうちに、比庵の字はちよつと面白いから、ワシもひとつ、ああいう風な字を書いてみようと思つたが、慈雲でたときこんでいるためなかなか柔かい字は書けない。それで眼をつぶつて書くことを考えた。初めのうちは一字二字づつ目をつぶつてかいていたが、だんだんこれが上手になり、一行ずつと目をつぶつて書くようになった。これはいわゆる盲書となつて面白いものになると思つていたんだか、惜しいことに帰庵和尚は非常に丈夫なように見えていたが、突然肝臓ガンで死んでしまつた。

その事を芸術新潮に書いて、それを神社の所に私から贈ると何か勘違いすると困ると思つたから、人から送つて貰つた。だけれども、どうも神社は盲書をやらずに死んでしまつたらしい。神社というのは寂庵の書を非常に山持つていた。その寂庵を非常に大切にしていいて、寂庵のいいものはみんな神社に取られたと国では言つてゐる。寂庵をみようと思つたら神社の所へ行けば見られると、こういうことです。盲になつたらどうしているかと神社の様子を聞くと、盲になつても時々寂庵を鑑賞する。第何番目の棚の第何番目の寂庵を持つてこい、と掛けさせてジーンとその字を味わつてゐる。偉いものだと私は感心した。それほどなら盲書ができると思つたんですが、もう精力的に衰えていたんですか、ついに盲書をやつた形跡が無くて死んでしまつた。非常に惜しいことだと思つておるんです。その帰庵和尚の話がまだある。帰庵和尚は、

若い時に畠山八洲という書の先生に、これは又、やはり漢字と書とができる人だということですが、その人について書を読んだ。ところが、八洲先生に叱られたことが二度ある。第一番目は、八洲先生が書を二枚以上書くものではないわナ、こう言って叱られた。北陸の方の人で、ないわナと、こう言う。もう一遍は、ちよつと読めない所があるのでそこを讀んでくださいと、こう言ったら、書は読むものではないわナ。こう叱られた。ちよつとこの問題に触れようと思う。

八洲先生は書は二枚以上書くもんでないと、二枚は書いたらしい。書を二枚書く、それと同じ話が横山大観の絵にある。横山大観は初めのうちは五枚描いた、同じ絵を、いいと悪いとにかかわらん、よい出来、悪い出来にかかわらないで、五枚描いた。そしてその五枚の中の一枚を選んで作品に出す。あとは破るんです。これは書き直しという意味ではないに、よく出来ても出来なくとも二枚あるいは五枚書くというのはどういうことだろう。これは書道の上でも考えていい問題じゃないかと思う。他日それを見てよく出来なければまた書き直す。こりや本当の書き直しですけど、書き直す時も二枚なり五枚なり書くところが、じつは私は書き直しの名人なんです。書き直し書き直して書道を育てていった人間です。そりやあ親ゆずりで、親が書き直しをうんとやっていた。で、私もその親にならつて書き直しをやっている。親父はそれを見て、この子は羊の歳だから紙をよく食うと笑う。書き直しは昔からやっていたんですが、私はその畠山八洲先生の話聞いて、書き直

しの仕方を変えました。書き直しを一字か二字か書いて、いけないからといって、パツと捨てて書き直すというところはもう絶対にやらない。字は書き始めたらしきまで書く。そうして、いけないのは捨てる。という書き直しの方法に改めました。しまいに、二枚書き五枚書きということにこの頃はやっていまず。そして、あとでそれを見て、ええものをだすというように。

芸術というものは、歌でも書でも、この制作しながら批評するというのが一番毒だ。制作をする時はもう批評しない。ですから、あとで批評をして、いいものと悪いのを決める。どうも制作をしながら批評をしていると、つまらん書き直しになる。何枚も何枚も使う。日展を制作する人が一反使ったとか二反使ったとかいう話を聞いておるが、そうなつてくる。一遍になんぼ書き直しても、きりがいい。そういう書き直しをしないで、書き直すにしても全部書いてしまつて、そうして書き直す。それよりも今の二枚書き五枚書きが、私はエエと思う。私の経験によると批評しないといつても、こりやあよく出来た、こりやあ少し悪いということはまあ自ら感じます。ところが後から見ますと、良く出来たと思うのがかえつて悪いことがたびたびある。それで私は、この制作中に批評するのは非常に悪いと悟つたわけなんです。

＊

もう一つ、書は読むものではないというのも書道界の問題となつていいと思ふんです。書はただ見ただけで味わかる。宮田重雄先生

が私の書展を見に来られて、大変気に入りましたね。これからは私の勘定でもつて、毎年展覧会をひらけという。それが今御紹介された十二月にある吉井画廊の展覧会です。その宮田先生が、書いてあることは読めないのですけど、書はただ見るだけで、絵を見るのと同じように見て面白いと、こう言っている。小糸源太郎さんもそういうことを言っておられた。絵描きの方から見ると、絵を見るのと同じような調子で、書を見ているのが面白いということになる。だから書は読むものではないと畠山先生が言われたというのは、昔からそう言っているのか知らんが、今の人から言つても、書は読むものではないという見方もあると思わねばならん。

でも、私は必ずしもそうは言わんのです。やはり完全に味わうには、読んで味わった方が味わえるという書があると思う。日展の審査なんか、どうなつているか知りませんが、読んで審査しなければ、本当の審査はできないと思う。良寛の書を見ましても、見たところ非常に美しい。あの書には景色があると、私は言うんですが、それをいちいち読んでみますると、微妙な一字一字の中に、多少批評の余地があるのもあるように思う。だから、全体で見るのもいいんですが、しかし、本当に書を審査するには、読んで審査するのが本当じゃないかと私は思う。と同時に読まなければ味わえないという書もある。

中川一政先生が、よく私の岡山県の下津井という港の金波楼へお泊まりになるが、あそこは中川先生が一週間位、逗留して画を描かれる所なんです、その金波楼の主人に、何

か字を一つ書いて下さいと頼まれ、そこで先生しばらく思索して書かれたのが、「馬車馬」という字です。これが実にええんです。先生はちよつどその時の生活感情にピッタリした言葉として選んで書かれたと言え。中川先生が書をかくのを、金波楼の主人に聞くと、実に遅い。なんぼ時間をかけるのか、実に遅く、ジリジリと書く。そういう書で、馬車馬と書いたのが、実にええ。これは馬車馬と読まなければ面白くない。読むとその書が断然面白くなる。

武者小路先生の書にしても、あれは読めるように書いてあるから、わけなく読めますが、あれも、その読まない面白くない、読まないで、ただ見ただけでは面白くない。そういう書もある。それから書はですね、読まないでもいいけれども、読めれば読めるように書いた方がええと思う。それから私は、書は沢山書くよりも、大きい字を少し書いた方がええ。作品としてですよ。作品としては、これからは沢山字を書いてもなかなか読む人がない。読まなくてもいいんだが、しかし、味わうのにも、大きな字を少し書いた方が現代人には味わいやすい。絵と同じように味わえると思うんです。私は多くの場合、漢字はよくお茶人が五字一行ものを大事にするように、多く五字一行ものを書きます。あるいは横ものにして、二字三字というものをよく書きますが、やはり少し書いた字の方が、皆に味わって貰うには都合がエエと思う。それで書は、中川一政先生の馬車馬の話をしました通りに、ジツと考えて自分の当時の生活感情にピッタリしたものを書くと、書が生きて。

墨場必携なんか見てこれが良かろうと書いたんじや、書が生けない。まるで生けない。だから、やはりその内容が非常に書に対して影響すると思う。内容のピッタリしたもの、作者にピッタリしたものを書かないという、書が生けない。そういうふうには私は思う。

私の先輩で、私より十か十一ぐらい年の寄った先輩で、これは日本銀行の出納局長をやった人ですが、やっぱり昔の士族ですから、漢字、書道が得意なんです。で、漢詩を作って書をよく書く。それが、ずっと前のことですが、私の展覧会を観に来てひとわたり見まわして、秀さん、お前も少し書考えた方が良くないか。そうですか、寂庵はいけませんか。オー寂庵はエエけれども、仙厓はいかんぞ、こう言つて帰つたんです。その人の書は私は良く知っておりますので、そう言われるのもつともだと思つておつたのですが、それから後に寄こした手紙の中にこの詩が書いてあつた。その詩を今から読みます。

上下三千歳、書家おのおの門を樹つ、
筆は須らく意に従つて選ぶべし、字は
形を以て論ずることなかれ、一気龍蛇
の形、満箋風雨の痕、古今泥む處なく、
妙訳自然に存す。

とこういう。これは自分の書の事を論じておるのであるが、ところが私の書にも何だか当てはまるような気がする。この書論というものは、実際に当てはめて論じて貰わないと、ただ書論で聞きますと、同じ事を言つておるんだけれども、実際に当てはめてみると、その意味が非常に違つておる。そう言うことがありますので、私は、その老人のこの詩をえ

らい有難く思ひまして、一気龍蛇の形、満箋風雨の痕、というこの句が非常に気に入りました。それを口ずさんでおりますと、自分の書が良く書けるような気がして、暫くそれを口ずさみながら書いたものです。

その口ずさむということについて、今の畠山八洲先生の話がある。八洲先生は書く詩を朗唱しながら書いておられたというが、それは會津八一先生もその通りで、大きな声で歌を言いながらその歌を書いておられたという。今、申し上げたように自分の氣にいつた、これと言つた自分の生活感情にピッタリしたものを書くには、そういう風に声に出して書くのも一方法かもしれない。私はなるべく顔を和らげて、温顔にして書く。顔を和らげて書くというと、書が和らかに出来ると思つていた。ある時、例によつて書をかいてくれというから、書をかいていた。パチパチ周りで写真を撮しておる。その写真が出来てみますと、顔を和らげて書いたところでない。眉に皺をよせて恐ろしい顔で書いておる。こりやなかなか顔を和らげて書くというわけにはいかんわい。それで、なるべく顔を和らげて書くようにと努力しておるわけなんです。

それで、ある友人の書家が立派な作品を作るために、私は歌を作つてこれを挿入した。喧嘩する如く書をかく人もある我は
愛人とダンスする如く

と、こつやつた。愛人とダンスするように書けると非常に具合がいいんですけども、なかなか今そういうふうには書けない。ほんとは書けりゃいいんだけど、そういう風に努力するといふわけなんです。

*

日本タッパーウエアの社長をしておつたジャクソン・W・ダート・ジュニア。ダート・ジュニアというから、小供の方のダートと言ふんでしよう。ジャクソン・W・ダートという人ですが、この人は生まれながら車椅子の人、身体不自由者なんです、そこで日本へ来ても、身体障害者に非常に同情を持っております、赤十字に一千万円を寄付したり、それからその他いろんな仕事を日本で身体障害者のためにしておる。で、その人が、身体障害者の子供達から募集をして、詩と絵とのコンクールをした。その詩が四百かしらん集まつた中で、その一割ほど取つて本にしておる。その本の巻頭に書いてある詩が、

私はランドセルがしよえるようになつた。 / 私が歩くとランドセルの中で筆箱が踊っている。 / 私の歩き方が変だから踊っているのかしら。 / 上手に歩けるようになつたら筆箱も静かになるかしら。

と、いうのですが、それを大きく書いて自分の客間にはめておくことを考えまして、書くことを私にお鉢がまわつてきた。どうも私の家は狭くて大きな紙は取り扱いにくい。それで、ちゃんとはめこむように仕立ててくれ、私が行つて書く。行つて一本勝負で書こうとこつやつたのです。それで私がそのタッパーウエアの客室へ行きましたところ、非常に豪華な客室で、それはアメリカから大事なお客様が来た時に招待する客室なんです。そこへ行つて、一つ運だめしにやつてみようと思ひまして、書きました。たいしたまごつきもせず書いて立派にできあがりました。さて、

アメリカのお客様が来て、それを見て、どう思われるかしらんと思ひましてネ。私の孫が又、可笑しな孫で国際結婚をしておつて、相手はアメリカの新聞記者ですが、私の所でその話をして、どうなんだろう、アメリカ人がこれを見てどういふふう感じとるだろうと言つたら、電話をかけて聞いてみると言つて、タッパーウエアの社長に電話をかけて聞いてくれた。ところが社長は非常に上機嫌で、これは非常に成績がええ、アメリカから来るお客様が非常に喜んでくれる。あれが一番の御馳走になつておるんだから、という返事でした。今読み上げましたあの詩が、誰にでもわかり、適当に訳されるでしょうから、それも大変良かったんと思うが、同時にそれを書いた私の書がアメリカ人に鑑賞され大変喜ばれているということ聞きまして、私もちよつと安心した。日本の書壇というものが、アメリカ人にも解る。こういう確信を持つた。また広島で私が展覧会をした時に、二人の外国人がその展覧会を見て、この作者の展覧会が東京でもう一遍あるんだということ聞きまして、広島からわざわざ東京まで見に来ておる。これは書が外人に解らんとしたことではない。だが、外人として解る場合は、日本人が書を見るようにはない。この頃はやりのアブストラクトの線の芸術として見るのかもしれないが、外人でも線が解るといふことを私は確信して、これは書も世界的になれるわいとこつやつた。日本人の日本が世界的になるのです。日本が世界の真似をして、いろいろアメリカやドイツの真似をして、日本がアメリカに似てきて、ドイツに似てきて、そ

れで日本が世界的になるといふのは、これはもう第二義的世界なんです。日本が世界的になるのには、日本のオリジナルが世界に認められるということが、日本が世界的になるのです。柔道というふうなもの、茶道というふうなもの、その中に書が入ると思う。書は、支那は別として日本独自の芸術で、線の芸術である。これは日本のオリジナル、これが世界的に、世界の人が味わえるということになると、やはり書道というものは、世界的な一つの要素となると思う。そのように私は考えて、嬉しかったわけなんです。

＊

次は、山本発次郎という人の話です。私は高梁の中学校ですが、その中学校に、私より二三年下級生で、背の小さい可愛らしい子がいた。それが大阪の豪商山本発次郎となると、俄然背も高くなり、眼光炯々としてきて、えらい偉丈夫になって、私なんか近よれない。そして盛んに書道を論ずる。この人は書道を論ずるだけあって、書のいいものを非常にたくさん持つておる。それで、書を日本第一の芸術だとかいふんです。日本の芸術の中で書が第一だと。

絵は風景とか人物とかいふものをかいて絵になる。歌もその通りで、風景人物を詠んで歌になる。書はそんなもんじゃない。作者がすぐに線一本で出てくるんだから、これは作者と直結しておるもんだ。だから人間本位に見て、これほど尊い良い芸術はないんだと、こういうことを主張しておるわけなんです。これが米山を発見したと云うて自慢なんです。発次郎が米山を発見したと云うて良い

くらいですが、後に第二回目にもうひとつ、米山を掘り出そうとして松山に行つて、暫く滞在しているうちに病気になる、それでうちへ帰つて療養しているうちに、喘息なんです。が、医者が止めるのも聞かずに薬を二度分一遍に飲んだ、それで死んじゃったんです。そのワンマンの性質が表れた死に方をしておる。米山を探しておるうちに、米山には非常にええのもあるが、悪いのが馬鹿に沢山ある。沢山の悪い中にまたええのがある。そのええのを選ばなきゃいかんと言つておる。小池君が、その米山と副島蒼海との書の印刷がある墨美という本も持つてきて、私にくれました。それを見ておりますと、私はなるほど、この蒼海にしても米山にしても第一級の、書道では逃すことのできない人物だと思つておりますが、その雑誌を見ると、随分まずいものもあるし、ええのものもある。それで、私は見ながら考えた。まずいのが、えらい勉強になる。ええのも勉強になるが、まずいやつが勉強になる。これは、ええ人のまずいやつは、そのまずいと言つても、そこにええ所がある。それが非常な勉強になるので、それを探してですね、山本発次郎とは反対に、米山のまずいやつを探してみたら面白いことだと思つておるんです。山本発次郎と議論をする機会がなくなつたので、はなはだ残念なんです。私の友人で発次郎の友人でもある人にその話を見ると、駄目々々、山本発次郎は君の絵や書を見るといふと、一遍でやつつけるぞ、と云うから、いやいやそりややつつけられてもええ、六十にして耳順うんだ、いっこう構わないんだと云うてやつた。

次に発次郎は大雅堂の書のことをさつぱり言わない。大雅堂は彼の蒐集の中に入つてない。私は大雅堂はええと思う。若くして死んだだけでも、大雅堂は非常にええと思う。その相異だけ、山本発次郎と意見が合わない。もうひとつ私がかねて歌でも言つておるんですが、書でも言いたいのは、之を評価する時は、今言つたように減点主義でいかなきゃ仕様がなければ、書を鑑賞する時には、減点主義で鑑賞したら、もう制作のためにはならん。こりゃあ、減点主義でなく、ええ所を見てゆく。どんな書を見るのでも、まず、ええ所があるかないか、無ければだめだ。ええ所があるのは、ええ所を逃さずに見てゆくと云うのが、芸術の修行には、非常に必要だと思つておるのです。この点が山本発次郎の書の見方とは全然異なる。これは書の作者としての書の見方と言いたいのであります。

以上、比庵の講演筆記録は、一行四〇字で一頁一八行、総字数一五一六〇字に及ぶ。あとがきには次のようにある。

これは昨春秋、清水比庵先生が全国大学書道学会の席上で講演されたものの筆記です。新しい日本文化の方向を示唆する貴重な内容を多く含んでいと思われるので、先生のお許しを得てここに一冊としました。小池邦夫・清水義光

また、比庵自身、『紅をもて』の文中「よいところを見付ける」の項において、この講演についての感想を記しているので紹介しよう。

十一月十九日、東京学芸大学に於て全国大学書道部先生の集まりの席上何か話をせよといはれ会場に行つてみると、諸の先生が集まつておられ相当年配で斯界に聞えた人が多く、このやうな先生方を前にして何を話してよいかとたじろいだわけなど、諸先生皆にこにこ自己紹介をしられ、多くは小生のことを名前くらゐは承知してられる模様なので、小生もえらい心安く覚えて之ならまんざら話の出来ないこともあるまいと思つた。それで一時間あまり小生の体験について話したが、ところどころ笑声も爆発してメモを取る人もあり、一生けんめい小生の顔を見て聞き入つてゐる人もあり、先づまづ気持よく話を終わることが出来た。

比庵の満面の笑顔が見えるようである。

筆者はかつて相模女子大学に勤務しており、前田先生には非常勤講師としてお力添えいただいた。また、故城所正先生(横浜国立大学名誉教授)も同じ頃非常勤講師としてお力添えいただいた。城所先生は比庵佳境の会会報第十号に「清水比庵の故里・備中高梁歌碑めぐり」、第十一号に「第二のふるさと・備中笠岡を歩く」の二本の紀行文が掲載されている。お二方の先生と一緒には金沢や奈良などの学会に参加したことを懐かしく思い出しながら、比庵翁との三者三様の関わりや繋がり、不思議に思う。残念ながら先生方と比庵を語る機会は無かつたが、比庵生誕一四〇年の本年、このような形で比庵の世界を共有することができたことを感慨深く思う。

「比庵佳境の会」と 墨の美術館「比庵富士展」

墨の美術館館長 濱崎 道子

「比庵佳境の会」は、比庵芸術境をこよなく愛し末永く後世に語り継いで行きたいと言う、比庵愛好家有志の熱い想いから二〇一三年一月二六日に結成されました。

折から、濱崎が横浜市青葉区の自宅を改築し「墨の美術館」の柿落としに「比庵展」開催を計画し、この日は「比庵展」に向けての打ち合わせの日でした。冒頭に濱崎が、当館を比庵芸術境を語り継ぐ拠り所にした旨と、今後比庵の芸術境を後世に語り広めて行く為の会の必要性を提案したところ、参加者十五名の承諾を頂くことが出来、「比庵佳境の会」は誕生したのでした。会名の「佳境」は比庵が生前に好み、モットーとしていた良寛の言葉「毎日佳境」に因んだものです。会長には清水固氏。他に会長代行、事務局、会計も即座に決定。会の活動内容についても具体的に決議され「比庵佳境の会」は幸先良く歩み始め、翌二〇一四年六月には会報第一号が発刊されました。会報はその後一〇年にわたり年二回の刊行された事は、会長清水固氏の情熱とご尽力の賜物と心より感謝致しております。

さて、墨の美術館オープン記念「比庵富士展」は、比庵が生前開催し得なかつた富士山の書・画・歌（八〇歳〜九〇歳制作）十七点の展示は圧巻でした。近隣はじめ全国各地か

ら比庵ファンが駆け付けて下さり、連日賑わいました。会期中の參觀者は四〇〇名を越え比庵芸術境を楽しんで頂くことが出来ました。初めて比庵を見る驚きの声も多く、これまた嬉しい事でした。

二〇一三年開設以来墨の美術館では毎年テーマを設けては比庵展を開催しています。今年三月三日〜四月十六日「比庵あけくれ」清水比庵生誕一四〇周年記念展を開催しました。毎週、ギャラリートークや比庵茶会等のイベントを催し盛況でした。墨の美術館ではこれからも「比庵の芸術境」を継承する活動を続けて参りたいと思いますので、今後ともご支援ご協力の程をよろしくお願いいたします。以上

清水比庵展 きび美ミュージアム

笠岡市 豊池 勇

清水固会長さんありがとうございました。一〇年間の長きに亘り会長を務め、清水比庵芸術の世界へとお導き頂いてまいりました。心より感謝と敬意を表します。

おかげさまで私たち会員は各々が持つ比庵先生に対する想いや比庵芸術に関する感想を発表し合うことが出来ました。その事は会員皆さまの心の拡がりへと展開したものと確信しています。清水比庵生誕一四〇年を節目として清水比庵芸術はワールドワイドに拡がって行く兆しを見せています。最近の動きとしてアメリカではメトロポリタン美術館に全

紙に堂々と揮毫した「良寛詩」が收藏され、スミソニアン・ナショナル・ギャラリーには「松・竹・梅」の三幅画が收藏されました。

ロサンゼルスに住む固会長の妹・充子さんの長男ロバートさんはアメリカ国内で清水比庵芸術を普及させるサイトを開設し、全米とヨーロッパ各国を主な対象として全世界に発信していく準備を進めていると聞いています。また彼は清水比庵作品のジグソーパズルやカレンダー、そしてポストカードを制作販売して世界に売り出す構想を抱いています。近い未来に世界の多くの家庭で北斎や広重と並ぶポピュラーな日本美術として世界の人々に親しまれるように成る可能性も見えて来ました。

日本国内では、二〇一三年一月六日（金）（二〇一四年一月十六日（火）倉敷市の美観地区に在る「きび美ミュージアム」で「清水比庵展」が開催されます。それに伴い二月九日（土）には「清水比庵と出会う」茶会が企画されています。詳しくはきび美ミュージアム Tel 086-425-8080 または Eメール



いにしえは萩をすすきき秋といえど
それに勝りて柿はうれしも 比庵七十九

info@ribibi.or.jpまでお問い合わせください。この展覧会では初公開の清水比庵名品に出会う事が出来ます。茶会では比庵絵付の茶碗に接する事が出来るでしょう。今から楽しみです。

会報誌は終了いたしましたも清水比庵を楽しみ新たな展開が見えています。清水比庵芸術はこれからも更に拡がり、多くの人に幸せを運び続ける事でしょう。以上

生誕一四〇年 清水比庵展

岡山県立美術館

二〇一三年十一月十一日（土）〜十二月一日（日）
生誕一四〇年を記念し、美術館所蔵作品にご遺族の未公開作品などを加え、自由奔放な比庵芸術の魅力が紹介されます。
<https://okayama-kenbi.info/>です。

最終稿にあたり、今後のことは別紙を
ご参照下さい。 幹事

会費納入のお願い（未納の方のみ）
2023年度会費を下記に納入されますようお願いいたします。
一口、1,000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店
普通 7061558
名義 クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
携帯 090-6340-9181
URL : <https://hiankakyō.com>
幹事：比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488